様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２８９４

研究課題名（和文）文物考古資料による唐～宋代オルドス地域の歴史的構造の研究

研究課題名（英文）Study on the Historical Structure of the Ordos Region during the Tang and Song Dynasties by the Historical and Archaeological Sources

研究代表者
村井　恭子（MURAI, KYOKO）

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：５０５６９２９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、唐～宋代にオルドス地域を拠点に活動した遊牧勢力の実態を、文献資料と考古資料を用いて解明すること、また、彼らの軍事力によって活性化された唐～宋代のユーラシア東部地域の政治・社会を再構成することを目的とし、つぎの成果を得た。(1)研究期間の1, 2年目に中国に赴き、当地の研究者の協力のもと、石刻史料・遺址・遺物の調査と景観調査を行った。とくに文字資料については、原物調査をもとに最新のテキストを作成した。さらにその分析から、当該地域の遊牧民の実態をより具体化できた。(2)最終年度に、現地調査の成果を発表するワークショップを開催した。さらに、そこで得られた意見をもとに成果報告書を作成した。

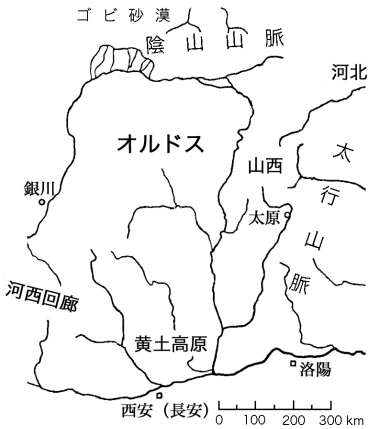
研究成果の概要（英文）：This research aims to elucidate the actual situation of nomads who were active in the Ordos region during the Tang and Song dynasties, on the basis of the historical and archaeological sources. The study puts its focus on an elucidation of the historical culture of the Eastern Eurasia activated by pastoral nomads. We got the following two main results. 1) In our field survey in 2015 and 2016, the historical and archaeological sources on pastoral nomads in the Ordos region were gathered. With regard to the historical sources in particular, we were able to materialize the actual situation of nomads in the area. 2) A workshop was held in 2017 for the Ordos nomadic people and our field survey. Finally, we made a research accomplishment report based on our workshop.

研究分野：中国史

キーワード：東洋史　唐代史　宋代史　オルドス　石刻史料　遊牧民

１．研究開始当初の背景

オルドス地域とは、北をゴビ砂漠、南を黄土高原、東を太行山脈、西を河西回廊に挟まれた乾燥地域を指す。ここは、古来、遊牧勢力の居住地であり、また中国内地とモンゴル高原・中央アジア・チベット高原等諸地域間との交流の結節点であるとともに、北方や西方の遊牧勢力との係争地ともなった。前近代の中国史が、周辺の遊牧勢力との抗争・融和を軸に展開してきたことは贅言を要しないが、オルドス地域もまたその重要な舞台のひとつであった。




北朝～宋代の諸王朝は、その成立や拡大において北方や西方、そしてオルドスの遊牧勢力の軍事力を利用し、また帰順した遊牧勢力を蕃部・蕃兵として取り込んで辺境防衛や外征の一翼を担わせ、国家の安定に努めた。ただし、中国に取り込まれた遊牧勢力遊牧勢力は、直ちに漢化して中国社会に没入したのではない。北朝・隋・唐を建国した鮮卑の拓跋集団、突厥第二可汗国を復興させ、8 世紀の安史勢力のもととなった突厥遺民、後唐～北宋の諸王朝を建国したトルコ系沙陀軍団、西夏を建国したタングート等は、オルドスを揺籃の地として逆に勢力を拡張させ、その軍事力はしばしばユーラシア東部地域の歴史構造を転換させる原動力となったのである。

応募者はこれまで、唐代オルドス地域を拠点とした遊牧勢力（吐谷渾・タングート）が独自の勢力基盤を築くプロセスや、彼らを辺境防衛の軍事力として取り込んだ唐朝の辺境政策について研究を進めてきた。大局的にみれば、オルドスを含む華北一帯は、農業・牧畜・遊牧の生活形態が融合する、農業－遊牧境界地帯に属し、次代の中国の歴史を左右する勢力が力を蓄えるリザーヴァー的性格を有してきたとされる。

従来の研究は、北朝～宋代の漢語石刻史料の発見が相次ぐ山西・河北地域に関心が集中し、次世代の歴史の担い手を輩出したオルドス地域は等閑視されてきた。このため、オルドスに定着した遊牧勢力の実態、すなわち国家生成のプロセス、組織編成、軍事力の運用、人的供給、対する中国王朝側の管理体制などについてはなお未解明の点が多く残されてきたのである。

２．研究の目的

以上の点をふまえて、本研究は、時に中国王朝を支え、時にその枠組を刷新する力となった遊牧軍事力を生養し輩出し続けたオルドス地域の特質を明らかにし、そしてこのオルドス地域の遊牧軍事力を軸に展開した唐～宋代ユーラシア東部地域の歴史的構造を解明することを目的とする。具体的には以下の 3 点を目標とする。

(1)オルドス地域から発見された、唐宋代の漢語・古代トルコ語文献史料を蒐集・解読し、信頼性と精度の高いテキストを提供するとともに、それをもとにして当該地域の遊牧勢力とその軍事力の実態を多角的に分析する。

(2)一方でこの地域には、辺境防衛・異民族統治のために設置した唐～宋代の城塞・燧燧等の軍事施設の遺構が多数遺されており、また遊牧民の埋葬遺跡ならびにそれに伴出する石人という遺物も発見されている。これらの考古遺址・遺物は、遊牧勢力やそれを統制する中国王朝側がこの地域に展開した軍事力の規模や組織編成、行軍ルート、兵站線、遊牧勢力の拠点、部族構成などを考察する上での重要資料となる。また、こうした遺址・遺物周辺の景観調査によって、遊牧民の活動を可能とした環境的要因（気候、標高、植生、水系の位置など）を探り出すこともできる。本研究では、上記の文字資料とこれら考古・地理学的情報とを比較検討することによって、遊牧勢力の活動をより立体的に描き出すことも目標のひとつとした。

(3) オルドス地域は、唐・五代から連続して宋代に至るまでリザーヴァーや農業―遊牧境界地帯として中国史を動かす原動力になっていた。また、西夏・契丹も北宋とオルドス地域の支配をめぐっての角逐を繰り返しており、当該地域の情勢がユーラシア東部地域の歴史展開に作用していたことは明らかである。本研究では、宋代も視野にいれることで、オルドス地域における遊牧民の活動を長期的に分析する。

３．研究の方法

本研究では、オルドス地域における文字資料・遺址・遺物の現地調査とその分析を主眼とする。また、国内外の研究機関が所蔵する、オルドス地域の遊牧勢力に関連する文字資料の調査も行った。調査対象とするのは、7～12 世紀にオルドス地域を拠点としていたトルコ系（突厥・沙陀族・契苾）、モンゴル系（吐谷渾）・チベット系（吐蕃・タングート）の遊牧諸勢力である。また、本研究の参加メンバーは、各自の専攻に応じて史料言語・研究分野を分担して研究を進めるが、同時に定期開催する会合を通じて、横断的に各自の研究成果・情報を比較検討し、7～12 世

紀という長期間におけるユーラシア東部地域の歴史的構造の特徴を再構成することを目指した。

現地調査については、以下の通り。

(1) オルドス地域からは、唐～宋代に属する漢語・古代トルコ語の石刻史料（碑文・墓誌・岩壁銘文）、漢語・チベット語の文書史料などの文字資料が発見されている。このうち、唐～宋の在地官僚や将官が書き残した漢語文字資料については写真複製・資料集の公刊も進み一定の研究蓄積があるが、従来の不鮮明な写真複製では細部の判読は困難であり、またテキストの誤読も目立つため、原資料の実見調査を行った。

(2) オルドス地域に点在する城塞・燧燧・埋葬遺跡・石人等の遺構のうち、とくに唐代の州城・都護府遺址と対西夏・対金戦の最前線となった宋代城塞を集中して調査した。近年、これらの遺址付近から蕃将・蕃兵の墓誌が新たに発見されているほか、城塞付近の仏教石窟寺院には蕃漢の軍民が残した題記が存在することも報告されている。これらの文字資料や遺址は未だ十分な調査も行われておらず、現地調査により最新のテキストを作成し、中国諸王朝のもとで辺境防衛の軍事力として取り込まれた遊牧勢力を組織編成・部族構成・信仰活動について分析を行った。

## ４．研究成果

### (1) 景観調査と遺跡調査

実地調査として、1 年目（H27）はフフホトから西安まで、オルドス地域を縦断するルートを調査した。これは唐宋代の辺境防衛ラインを北から南へ縦断するものである。景観調査を通じて遊牧勢力や中国王朝の情報伝達路・物資運送路を考察した。

2 年目（H28）は、対チベット防衛ラインとなる銀川から固原を縦断し、さらに平涼から西安へ向かうルートを調査した。途中、ソグドやタングート勢力の拠点であった塩州・塩湖の白池等へも訪れ、景観や都城・城塞遺跡を調査した。この 2 年間の調査は、北京大学栄新江教授・陝西省考古研究院王小蒙副院長・寧夏考古研究所羅豊所長等中国側研究者の協力のもと順調に行うことができ、また貴重な現地情報も多く得られた。

### (2) 出土文字資料調査

上記(1)の実地調査と並行して、各地の文物管理所や博物館を訪ね、中国王朝の羈縻支配に関する史料（文書・碑文など）を調査した。また中国では考古資料出土の急激な増加にともない、新しい博物館の建設が行われており、それらに収蔵される文物の調査も行った。

### (3) ワークショップ開催と研究成果報告書の作成

以上の現地調査の成果報告として、最終年度にあたる 3 年目（H29）、7 月 30 日（日）に成果報告の国際ワークショップを開催した。このワークショップは中央ユーラシア学研究会「中央アジア学フォーラム(第 60 回)」(主催：大阪大学教授・荒川正晴）との共催の形式をとり、会場は大阪大学で行った。

報告は本科研メンバーである村井・鈴木・赤木に加え、宋代オルドス地域の軍事史を研究する伊藤一馬氏（大阪大学・助教）の計 4 名が、以下の内容で行った。

①村井「唐五代オルドス・河東の党項・吐谷渾関係石刻史料」は、2000 年代に入り、唐～北宋の党項（タングート）・吐谷渾関係の墓誌等石刻史料が相次いで公表されている状況および中国における研究状況の紹介を行った。また一方で、日本の学界における新出史料の情報把握および関連研究の停滞状況に対し警鐘を鳴らした。さらに、新出墓誌を利用し、オルドス・河東に居住した党項・吐谷渾の生存実態について彼らの貫籍と生業に注目して考察した。

②鈴木「遊牧世界から見た唐代オルドス」は、北方勢力の南下圧力にさらされていたオルドス地域と遊牧中原とのつながりを考察する必要性を指摘し、唐の受降城など、遊牧民と中華王朝の葛藤によって成立した、オルドスをとりまく考古遺跡を取り上げ、遊牧民の移動経路についての再検討を試みた。その結果、オルドスは、遊牧民が十分に生活していける土地ではあるが、あくまで緊急避難場所としての性格が強かったことを明らかにした。

③伊藤「北宋期のオルドス地域とその軍事的意義」は、従来、宋代オルドス地域の軍事力の意義は、もっぱら北宋―西夏関係の中で論じられてきたが、北方の契丹（遼）や南方の大越との軍事衝突や反乱の鎮圧においても重要な役割を果たしていることを指摘し、契丹・西夏・大越と対峙する地域は「三方の急」として軍事的に重要視されており、また各地域の情勢は連動していたことを明らかにした。

④赤木「文書・石窟題記より見る 12 世紀オルドスのタングート系集団」は、10～12 世紀のオルドス地域に居住する蕃族の帰趨が宋・遼・金・西夏各国の戦いに大きく影響したことを述べ、従来、具体像を復元するのは容易ではなかったこれらの蕃族について、本科研で行った現地調査において収集した、陝北地域在住のタングート系集団が仏教石窟に残した漢文題記を紹介した。さらに、それをもとに 12 世紀半ばの宋金戦争における彼らの役割や同地域の仏教信仰について考察した。

このワークショップでは、リザーヴァー論について研究した石見清裕氏（早稲田大学・教授）と栄新江氏（北京大学・教授）の 2 名をコメンテーターとして招聘した。このワークショップで得られた意見・知見をふまえ、年度末の 3 月に研究成果報告書『文物考古資料による唐～宋代オルドス地域の歴史的構

造の研究』を作成し、印刷出版した。また執筆者の意向で一部非公開となったが、本報告書の電子版を代表者の村井が所属する神戸大学の学術成果リポジトリ（Kernel）に掲載し、無償で公開した。

(4)今後の課題

上記のように、唐五代期の吐谷渾や五代北宋期のタングートの、オルドスにおける信仰や生業に関わる生活実態および各中国王朝の辺境軍事政策のなかの彼らの役割・存在形態をより具体化することができた一方、現地調査によって、現地には当初想定していた以上の文字資料が現存し、その発掘調査が現在進行していることも判明した。そのため、3年間という短い期間では全ての資料を蒐集・分析することはできず、オルドス地域における遊牧勢力の人的供給のシステム、軍事力運用の特性など、未解決とせざるをえない問題点がいくつか残る結果となった。今後も現地調査や史料蒐集・分析を継続し、本研究が最終目標として目指した、オルドス地域を軸に展開した唐～宋代ユーラシア東部地域の歴史的構造の解明を図りたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

(1) 村井恭子「河西と代北――九世紀前半の唐北辺藩鎮と遊牧兵――」，『東洋史研究』74-2，2015 年，pp．29-60，査読有.

(2) 鈴木宏節「唐の羈縻支配と九姓鉄勒の思結部」，『内陸アジア言語の研究』第 30 号，2015 年，pp．223-257，+ 1 plate，査読有.

(3) 鈴木宏節「ゴビの防人―モンゴル発見の唐代漢文銘文初探―」，『史滴』第 37 号，2015 年，pp．59-80，incl．6 plates，査読有.

(4) 村井恭子「大唐西市博物館新蔵唐≪張茂宣墓誌≫考」，『中華歴史与伝統文化研究論叢』2，2016 年，pp．159-176，査読無.

(5) 鈴木宏節「2016 年度夏期モンゴル・ゴビ調査報告」，『青山學院女子短期大學紀要』70，2016 年，pp．107-125，査読無.

〔学会発表〕（計 10 件）

(1) 赤木崇敏「オアシスの水利と山間草原の遊牧民」，中央ユーラシア学研究会，2015 年 9 月 26 日，大阪大学（大阪府・豊中市）.

(2) 鈴木宏節「モンゴル高原における近年の考古調査――ゴビ砂漠の漢文銘文をめぐって――」，「モンゴル帝国成立基盤の解明を目指した考古学的研究」研究会（平成 27 年度 第 2 回研究集会），2015 年 12 月 19 日，淑徳大学東京キャンパス（東京都・板橋区）.

(3) 鈴木宏節「古代トルコ帝国における人的紐帯の一側面――史料状況と研究動向の紹介とともに――」，「ユーラシア諸帝国の形成と構造的展開」研究会（平成 27 年度 第 3 回研究会），2015 年 12 月 26 日，九州大学（福岡県・福岡市）.

(4) 村井恭子「中国史相対化的動向与圍繞日本唐史研究的情況」，東部ユーラシアの視点から見た中国中古史の転換点と新時代区分の可能性，2016 年 1 月 10 日、ソウル大学（韓国・ソウル市）.

(5) 村井恭子「懐信と保義の間――ウイグル可汗冊立記事の再検討――」，第 57 回中央アジア学フォーラム， 2016 年 7 月 30 日，大阪大学(大阪府・豊中市).

(6) 鈴木宏節「2013～2016 年度モンゴル調査報告――ゴビ縦断路の解明に向けて―― 」第 54 回日本アルタイ学会（野尻湖クリルタイ），2017 年 7 月 15 日， 長野県野尻湖.

(7) 村井恭子「唐末五代オルドス・河東の党項・吐谷渾関係石刻史料――研究状況の紹介と考察――」，文物考古資料による唐～宋代オルドス地域の歴史的構造の研究（科研研究班・中央ユーラシア学研究会共催ワークショップ），2017 年 7 月 30 日，大阪大学(大阪府・豊中市).

(8) 鈴木宏節「遊牧世界から見た唐代のオルドス」文物考古資料による唐～宋代オルドス地域の歴史的構造の研究（科研研究班・中央ユーラシア学研究会共催ワークショップ），2017 年 7 月 30 日，大阪大学(大阪府・豊中市).

(9) 赤木崇敏「文書・石窟題記より見る 12 世紀オルドスのタングート系集団」文物考古資料による唐～宋代オルドス地域の歴史的構造の研究（科研研究班・中央ユーラシア学研究会共催ワークショップ），2017 年 7 月 30 日，大阪大学(大阪府・豊中市).

(10) 赤木崇敏「見宋元時代公文書的事務処理程序――“検（案検）”与“案呈”――」，2017 年中国社会科学論壇（史学）第六届中国古文書学国際研討会，中国社会科学院，2017 年 8 月 10 日，北京(中国).

〔その他〕

本成果報告書：村井恭子（編）『文物考古資料による唐～宋代オルドス地域の歴史的構造の研究』，2018 年 3 月(科研費による自費出版).

電子版[一部非公開]：神戸大学学術成果リポジトリ Kernel　公開ウェブサイト

http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kern

el/81010264

６．研究組織
(1) 研究代表者
村井　恭子（MURAI, Kyoko）
神戸大学・人文学研究科・准教授
研究者番号：50569291

(2) 研究分担者
赤木　崇敏（AKAGI, Takatoshi）
東京女子大学・現代教養学部・准教授
研究者番号： 00566656

鈴木　宏節（SUZUKI, Kosetsu）
青山学院女子短期大学・現代教養学科・助教
研究者番号：10609374

(3) 研究協力者
伊藤　一馬　（ITO, Kazuma）
石見　清裕　（IWAMI, Kiyohiro）
栄　新江　　（RONG, Xinjiang）